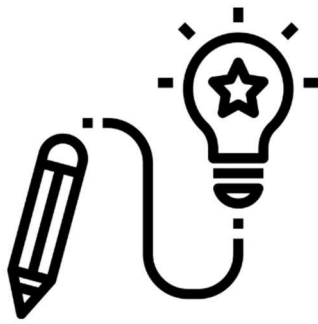


Ⅲ章

校内研究をデザインしよう



- 1 . 校内研究事例校から見てきた校内研究を進めるポイント
- 2 . 校内研究を進めるためのデータ・組織・年間計画の立て方

Ⅲ章 校内研究をデザインしよう

1. 校内研究事例校から見てきた校内研究を進めるポイント

これまで行ってきた校内研究について、いったん立ち止まって「本当にこのやり方でよいのだろうか」と問い直してみませんか。前例踏襲ではなく、これまでと違う枠組みに「気付く」ことで、校内研究の「意味付け」や「捉え直し」につながり、発展・深化させることができるかもしれません。

ここでは、学校の目指す姿や課題解決に向けて、校内研究をデザインする際のヒントになるよう、校内研究事例校等から見てきたポイントを示します。当然ですが、すべてを同時に満たす必要はありません。学校の実態に応じて、できるところから実践し、少しずつ取組を積み重ねてください。

学校の目指す姿や課題から出発し、子どもの姿を根拠に語り合い、チームと時間を確保しながら進めていく、その積み重ねが、校内研究を教職員一人ひとりの学びと学校組織全体の成長を支える、持続的な営みへと育てていきます。

ポイント1 「目指す子どもの姿」からスタートし、学校の課題を共有する

校内研究は、目指す子どもの姿や直面している課題、教職員自身が日常感じている気付きや願いを出発点として進めることが重要です。校内研究事例校では、

- ・子どもの主体的な発言が少ない
- ・授業中に「わかった」「できた」の声が響かない
- ・〇〇力に課題がある

といった日常の「モヤモヤ」やアンケート結果・各種学力調査等の具体的な数値データを手がかりに研究テーマを設定していました。研究にあたっては、学校教育目標の達成はもとより、教職員一人ひとりの思いや願い、困り等を丁寧に把握しながら、「この学校で何を大事にしたいか」を対話しながら視覚化して共有し、合意形成を図っていました。

校内研究の柱は学校によって異なります。授業改善を核に据える学校もあれば、学年経営や学校文化づくり、評価方法の見直しなどを軸に進める学校もあります。大切なのは、学校の実態から出発し、目指す子どもの姿を校内研究の「よりどころ」として明確にすることです。

ポイント2 子どもの姿（発言・行動・記述）を手がかりに語り合い、改善につなげる

校内研究事例校の授業研究では、授業の「良し悪し」を評価するのではなく、以下のような授業中の子どもの具体的な姿をもとに語り合うことを大切にしていました。

- ・発言内容や表情の変化
- ・学習活動の参加状況や周りとの関わり
- ・ノートやワークシートの記述

こうした子どもの姿を手がかりに、「なぜこのような反応が生まれたのか」「この活動の意図は伝わっていただろうか」「ここで意欲を見せたのは何が効果的であったのか」といった問いをもとに多様な解釈を重ね、授業改善につなげていました。さらに、授業者の思いや願い、困り等を踏

まえて授業を参観すると同時に、抽出する児童・生徒を意図的に設定し、その子の学びの変化を見取る工夫も見られました。

研究協議で得られた気付きや問いは、参観者も自分の授業で「試してみる」ことで日常の実践につなげていました。校内研究の成果を積み上げていくための工夫は、授業者だけでなく、参観者が授業研究や対話を通して気付き、内省しながらそれぞれの授業が少しずつ改善していくための「学び合いのコミュニティ」を生むことでもあります。

ポイント3 研究主任が抱え込まず、チームで進めるしくみをつくる

研究主任に負担が集中すると、校内研究は停滞してしまいます。校内研究事例校では、以下のように、組織として支え合うしくみを整え、無理のない研究体制で進めていました。

- ・研究部・学年部会・教科部会等のチームが役割を分担
- ・各部のリーダーが、メンターとして人材育成を担う
- ・事後研究会の準備、進行、記録、ICT 操作などを分担

こうした「一人に抱え込ませない」体制が職場の安心感につながり、教職員の「挑戦してみよう」「失敗しても大丈夫」「失敗から学ぼう」という心理的安全性を高め、校内研究を組織的に取り組むポイントとなっています。

研究主任は、すべてを決めたり背負ったりする存在ではなく、人と人、取組と取組をつなぐ役として機能することが求められます。「その人がいなければ」と役割が属人化してしまうと取組を積み上げていくことが難しくなります。チームで進めるしくみ（組織）をつくることによって、年度を跨いでつながっていく校内研究となります。

ポイント4 時間と資源を計画的に確保しつつ、柔軟に運用する

校内研究を持続的に進めるためには、ポイント3と合わせて、時間と資源（ヒト・モノ・コト）の計画的な活用・確保が必要であり、そのためには、管理職との連携が不可欠です。校内研究事例校では、以下のような工夫が行われていました。

- ・年間行事計画に校内研究の位置付け、短期に見直し教頭や教務主任等と進行管理する
- ・学習指導案や資料を簡略化し、効率を重視する
- ・ICTを活用して、指導案や記録（データ）を蓄積する
- ・年度末には、次年度の研究構想について教職員で協議し、管理職と見通しを立てておく
- ・外部人材を活用し、校内研究をブラッシュアップする

校内研究は「一度決めた計画通りに進めること」を目的とするのではなく、途中で立ち止まり、振り返り、必要に応じて修正しながら進めることも大切です。時には、研究の進め方そのものを見直すことも、校内研究のプロセスと捉えられます。校内研究が持続的な営みとなるよう、管理職と研究主任、指導教諭等が協働しながら進めていくことが求められます。

また、校内研究は内部完結するのではなく、近隣校と協働したり、指導主事等による指導・支援を依頼したりして、開かれた学校として取り組んでいくこともブラッシュアップにつながります。

ポイント5 心理的安全性の高い、学び合う文化を育てる

授業研究が負担や不安につながる要因には、「否定されそう」「責められそう」といった心理があります。事後研究会において、一部の人の意見に左右されるのではなく、一人ひとりが共同研究者として参加することが求められます。立場や経験に関わらず意見を述べる場が保障され、多様な解釈が認められることも大切です。校内研究事例校では、以下のような点が意識されていました。

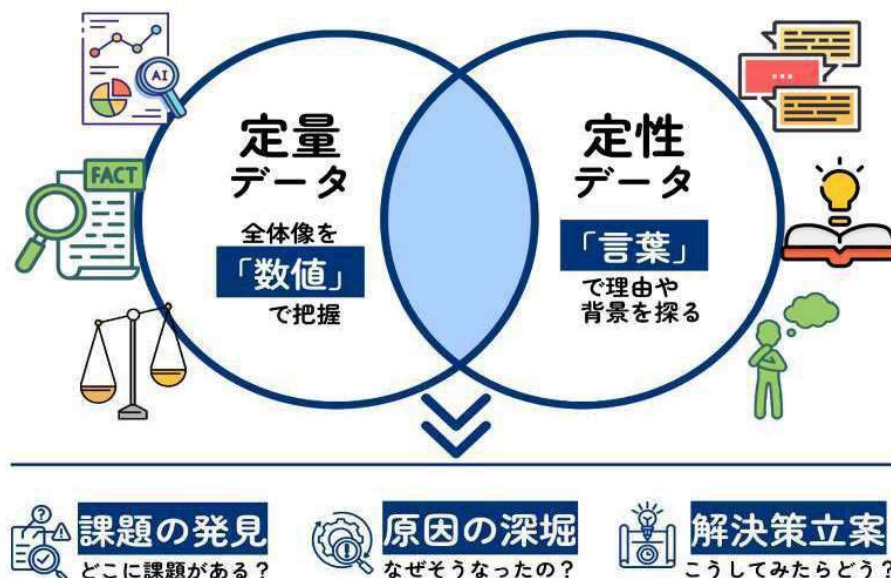
- ・研究協議を「授業者の反省会」にせず、参観者自身の振り返りの場とする
- ・子どもの姿を根拠に語り、多様な見方や解釈を肯定する
- ・成長や変化が見られた場面から語り始める
- ・授業者の目指す子どもの姿や困り・悩みを事前に共有し、授業を参観する

こうした方法により、普段から小さな悩みや気付きを気軽に共有できる関係が築かれ、同僚性を育んでいます。また、「挑戦ですから、失敗を恐れずに」と管理職が明言し、前例踏襲ではない新たな取組を後押しする姿勢があり、心理的安全性を高めていました。

「こんなこと言ってもいいのかな」と悩まず、安心して子どもや授業について語り合い、困った時に相談できる学び合う雰囲気は、すぐに醸成されるものではなく、また、一度できたら終わりでもありません。大切なことは、校内研究がうまく進まない時期や迷いが生じる過程も含めて、研究の進み具合に応じて繰り返し確かめ、「学び合う文化」を育てていくことです。

2. 校内研究を進めるためのデータ・組織・年間計画の立て方

データの活用



学校には、各種調査や学校評価アンケート、保健室・図書室の利用状況、授業や指導の記録など、日常の教育活動を通して多様なデータが蓄積されています。「データを校内研究に活用しよう」という考え方は、課題の把握や成果を見取っていくために大切です。

校内研究では、定量データと定性データを、研究の目的や学校の実態に応じて柔軟に組み合わせて活用することが重要です。例えば、数値から課題の傾向を把握する場合もあれば、授業中の気付きや児童生徒の声やアンケートの記述で課題を把握する場合があります。数値と言葉の分析を組み合わせるクロス集計等でも、実態を多面的に捉えることが可能になります。

また、こうした分析を支える手段として、生成 AI や分析ツールの活用も有効です。

○ 校内研究で活用する主なデータ

- ・学力調査や質問紙調査などの数値データ
- ・児童生徒や教職員の発言、授業中の様子、自由記述などの記録

○ データの特性

- ・定量データ：正答率や回答割合などから、全体の傾向や変化を捉える
- ・定性データ：発言やエピソードから、数値の背景や学習の過程を理解する

○ 生成 AI ・分析ツールの活用例

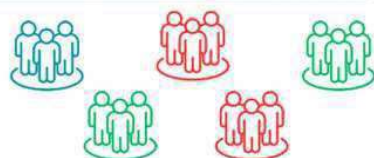
- ・クロス集計や相関の整理
- ・自由記述の分類や傾向の可視化

これらにより、解釈や対話、改善策の検討により多くの時間を充てることができます。定量データと定性データ、さらに生成 AI を往還的に活用することで、課題が具体的に整理され、「次は何に挑戦するか」という問いが生まれ、実践につながる校内研究が進められます。ただし、生成 AI 等を活用する際には、匿名化や権限管理、利用目的の明確化など、情報の適切な管理を徹底することが不可欠です。

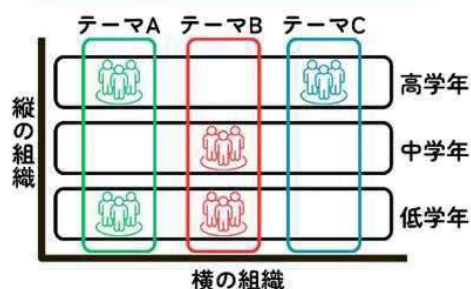
組織づくり

柔軟な組織づくり

問いに応じた少人数のチーム編成

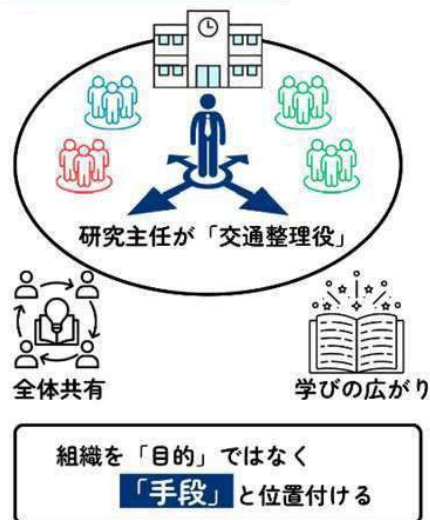


2つの組織軸でチームを位置づけ



学校全体への接続

進捗と成果を全体で共有



校内研究を進めるためには、教職員が協働して取り組むための組織づくりが欠かせません。しかし、組織を整えること自体が目的化すると、研究は形式的になり、実践につながりにくくなります。課題解決や問いの探究を進めるための手段として組織を位置付けることが重要です。

校内研究の進め方や組織の在り方は、校種や学校の実情によって異なります。いずれの場合も、「どのような課題を解決するのか」を起点に組織を考えることが共通点です。設定された課題や問い、テーマ等に応じて、柔軟に組織を編成することが有効です。

○ 校内研究における組織の役割

- ・ 研究の問いや学校の課題を共有する
- ・ 実践と振り返りを支える
- ・ 教職員の対話と試行錯誤を促す

○ 校内研究の進め方の一例

- ・ 小学校：学校全体の課題から一つの研究テーマを設定し、共通教科の実践を通して課題解決を図る
- ・ 中学校：教科の違いを踏まえ、学校教育目標や研究主題の実現に向けて各教科の実践を位置付ける

○ 柔軟な組織編成の考え方

- ・ 課題や問いに即した少人数の研究チームを編成する
- ・ 学年部会などの横の組織、テーマ別、教科別などの縦の組織との関係を意識する

ただし、少人数での取組が学校全体とのつながりを失わないように、研究の進捗や成果は職員会議等で共有し、場合によっては研究通信などのツールによって、学校全体で振り返ることが欠かせません。管理職とも相談しながら研究の進行に合わせて組織の在り方を柔軟に見直していくことが、校内研究を実効性のある取組へと導きます。

年間計画の立て方

4月から計画をスタート



課題



多忙な時期で計画や合意形成が難しい
テーマの設定が遅れ、実践も遅れてしまう
研究への意識が薄れてしまう

前年度から準備をスタート



メリット



課題を検討し、準備する時間が確保できる
組織づくりと実践の機動性が向上する
学校課題や研究の方向性の共通理解が深まる

多くの学校では、校内研究を1年間の流れとして捉え、年度当初から学校全体で共通理解を図りながら進める取組が見られます。この方法には、新年度のスタート時点で研究の方向性を共有しやすいという利点があります。

一方で、4月当初は学級づくりや分掌業務、新入生・保護者対応などが重なる多忙な時期です。その中で、研究の初期段階を進めることには課題もあります。そこで、上図に示すように、前年度の段階で研究準備を進めておくという考え方が有効です。

○ 年度当初に研究を立ち上げる際の課題

- ・「現状把握」「目指す姿や課題の共有」に十分な時間を確保しにくい
- ・合意形成に時間を要し、計画段階で研究が停滞する
- ・研究テーマの設定が遅れ、実践の時間が短くなる

○ 前年度に行っておきたいこと

- ・学校評価や各種調査・アンケートの整理
- ・成果や課題の共有
- ・研究テーマや方向性の検討

こうした準備を行うことで、新年度は、前年度の議論や成果を土台に校内研究を円滑にスタートすることができます。4月は、新たなメンバーによる「組織づくり」から始め、管理職や研究主任等が、児童生徒の実態や学校の課題、研究の方向性を丁寧に共有することで共通理解を図れ、4月当初から速やかに「実践」に移行することが可能になります。さらに、短い期間設定や小回りの利く組織編成を行うことで、実践と見直しを繰り返しながら研究を進める機動性が高まり、児童生徒と向き合う時間を十分に確保することにもつながります。